

## 埼玉県大学・短期大学図書館協議会(SALA)の活動： 地域における図書館連携の強化を目指して

鈴木正紀

The Activity of Saitama Academic Library Association (SALA): promotion of library cooperation in the area, by SUZUKI Masanori.

### 1. はじめに

正確な数とは必ずしも言えないが、県レベル、あるいはそれより広域の複数の県レベル、地方レベルの「大学図書館協議会」＝国公立といった設置母体を超え、「地域」をキーとして活動している「地域レベルの協議会」は、全国で30余りあるようである<sup>1)</sup>。これらの協議会は、地理的に近いことを生かした利用者の相互来館利用が円滑にできるよう制度を整えたり、加盟館職員の研修事業を行ったりしている。

筆者が所属する図書館が加盟している「埼玉県大学・短期大学図書館協議会<sup>2)</sup> (Saitama Academic Library Association: SALA) (以下、“SALA”と略称表記をする)もそうしたもののひとつである。

本稿では、そのSALAの概要を紹介し、特に、地域連携のために取り組んでいる事業の紹介を行ってきたい。

### 2. SALAの概略

SALAは1988年に設立された。記録によると、5月19日に設立総会が城西大学を会場として開催されている。この時の加盟機関数は31機関であった。この時採択された「会則」の第4条では、「目的および事業」を以下のとおり定めている。

本会は、会員間の相互協力を通じて、相互の改善向上を図ることを目的とし、その目的達成のために次の事業を行う。

- (1) 図書館等間の相互協力の推進
- (2) 図書館活動に関する調査・研究
- (3) 研修会等の開催

#### (4) 会報等の発行

#### (5) その他、本会の目的達成に必要な事業

SALAの運営は、最高議決機関である総会での決定に基づき、幹事会が日常的な会務をつかさどっている。その幹事会は年4～5回開催されている。また、幹事会のメーリングリストが運用されており、日常的な連絡はこのメーリングリストを使って行われている。また、総会で決定された事業を実施するために、幹事会内におおむね事業ごとのワーキンググループ(WG)を置き、各事業はそのWGで準備等が進められている。

幹事会はその互選により代表幹事館を選出する。代表幹事館は幹事会を招集し、時々で議論が必要となるテーマを幹事会の議題として設定して幹事会にかけようとしている。

幹事館の数については特に定められてはいないが、設立時は7機関で構成されていた。その後、加盟機関数の増加とともに幹事館数も増え、2012年度(今年度)は14機関となった。幹事会の構成は、国立大学1、私立大学10、私立短期大学2、独立行政法人1となっている。ここ数年、幹事館については多少の入れ替わり、増減はあるものの、大きく入れ替わるといったことはない(ここ数年は、13～14機関で推移している)。また、幹事(幹事館から1名乃至2名が出ている)については他部署等への異動によるメンバー交代はあるものの、例えば半数が入れ替わるというような大規模な構成メンバーの変更はない。そのため、課題や現状認識についての共有も十分なレベルでなされており、会務はおおむねスムーズに執行されているといつてよい。

加盟機関数は設立後順次増加していった。その途上で、キャンパスを東京に集中するなどの理由で脱

退するといった出入りがあったものの、現在は47機関(1機関で複数の図書館が加盟している例もあるため、加盟図書館数は49館)となっている。埼玉県という地理的特性上、東京に本部があり、ランチ・キャンパスが埼玉にある、という大学図書館がメンバー館であるというケースが少なくない(早稲田大、立教大、東洋大、大東文化大、東京理科大、立正大、東京電機大、芝浦工業大等)。47機関の構成は表1のとおりである。

表1 SALAの加盟館数(2012年現在)

国立大学	1
公立大学	1
私立大学	37
私立短期大学	7
独立行政法人	1

※大学図書館を短期大学が共用しているところは大学に含めた

運営に必要な費用は、加盟機関からの会費(年間6,000円)及び協賛企業から提供される会報やウェブサイトの広告料で賄っている。本稿では詳しく触れないが、物品等の共同購入事業を開始したこともあって、広告収入が増えたことが活動の原資にいささかの余裕を与えるようになった。

### 3. SALAの事業

会則第4条に基づき、現在のSALAはさまざまな事業を展開している。それは以下のようなものである。

- (1) 共通閲覧証による相互利用
- (2) 研修会の開催
- (3) 会報の発行
- (4) ウェブサイトの運用
- (5) 地域共同リポジトリの運用
- (6) 「図書館と県民のつどい埼玉」への参加
- (7) 共同購入事業の実施

このうち、本稿では、地域連携を目的とした事業である「(6) 図書館と県民のつどい埼玉」への取り組みについて紹介する。

## 4. 「図書館と県民のつどい埼玉」

### 4.1 イベントの概要(第1回の様子)

「図書館と県民のつどい埼玉」は、埼玉県図書館協会と埼玉県教育委員会が主催する、2007年に始

鈴木：埼玉県大学・短期大学図書館協議会(SALA)の活動  
 まったイベントである(後援機関としてさいたま市教育委員会と日本教育公務員弘済会埼玉県支部)。

開催趣旨は以下のように記されている。<sup>3)</sup>

「文字・活字文化振興法」の施行に伴い、地域における図書館の役割が改めて注目を集めている。

埼玉県図書館協会では、これまでも県民向けの図書館講演会を行うなど、県内における読書活動の普及に努めてきたところであるが、このたびの文字・活字文化の日(10月27日)制定を記念し、図書館サービスの一層の向上と読書活動のさらなる推進を図るため、県民とともに図書館のあり方を考える、「図書館と県民のつどい埼玉2007」を、県教育委員会との共催により実施する。…

第1回はさいたま市民会館うらわを会場として開催された。このときには絵本作家である長谷川拱子氏による記念講演「私の読書と子どもの読書」とともに、6つの分科会が開催されている。

分科会1：こうすればあなたの手元に資料が届く～ネットワークで広がる図書館利用

分科会2：あなたの力を図書館へ～図書館友の会づくりと活動

分科会3：地域で子どもと読書を楽しむ～子ども読書活動交流集会(地域・家庭文庫編)

分科会4：学校でこんなこともできる・している～子ども読書活動交流集会(学校編)

分科会5：読み聞かせ講座(たのしいおはなし会を持つために～子ども読書活動交流集会(実技編))

分科会6：高等学校における図書館活動～読む喜び、知る楽しさを深化させる専任職員存在とは

また、実技指導「製本入門～自分だけの本をつくらう!～」, パネル展示「よくわかる図書館ネットワーク」がこれと並行して行われた。

SALAとしては、この回はまだ正式な参加ではなかったが、幹事会で話題となり、有志による協力館という形で参加し、分科会1を担当した。埼玉県内に構築されている情報のネットワーク(埼玉県公共図書館横断検索システム)が、県全体の9割にあたる61の自治体・県の類似機関・埼玉大学・埼玉県立大学の参加により、全国トップレベルの横断検索システムとして2005年に稼働したこと、一方物流の

ネットワークとして、市町村立図書館・県の類縁機関への協力車・連絡車が週1回、県内の全自治体を巡回し、図書館の物流をカバーしていることが報告されている。

#### 4.2 第2回以後

2007年の第1回大会は、開催形態から考えると、「ブレ大会」あるいは、試行的要素が多分にあったようであり、現在のスタイルに落ち着いたのは翌年の第2回以降である。全体の構成はおおむね以下のようになっている。

- ・記念講演(午前。作家に依頼することが多い。これまでの例としては、落合恵子氏、あさのあつこ氏など)
- ・子ども読書活動交流集会(開催時間帯は午後。シンポジウム等の開催。)
- ・公共図書館、学校図書館(高等学校)、大学図書館の各イベント(全日。2011年の内容:公共図書館は東日本大震災関係の展示,学校図書館は高校図書館の再現・推薦図書の展示等。)

当日までの準備及び当日の運営は上記イベントごとに組織される「実行委員会」が担当している(運営組織としてはこの実行委員会の上に「企画委員会」という会議体が設置されている)。SALAは大学図書館部会としてひとつの実行委員会を構成しているわけである。

その第2回(2008年)以降、SALAはこのイベントへの参加を年度の事業計画の中に位置づけた上で、「SALA有志による合同展示」という形で参加をしている。共通タイトルを「大学図書館のお宝お見せします」としてSALA加盟機関から参加を募り、各図書館の所蔵資料を来場者に見てもらおうという企画である。

「お宝」とは銘打ってはいるものの、貴重書に限らず、その図書館を特徴づけるような資料の展示が心がけられているとあってよい(もちろん、貴重書を豊富に持っている図書館はそれを出してくる)。

2008年以降の展覧機関と出展内容は以下のとおりである<sup>1)</sup>。

2010年は合同展示のほかに、公共図書館、埼玉県産業労働部の合同企画として、「わたしたちはあなたの一步を応援します～ご存知ですか?お仕事支援」として大学図書館のビジネス支援をテーマに、大学図書館6館と国立女性教育会館の蔵書から80冊

2008年(会場:浦和コミュニティセンター)  
サブタイトル:ニュートンからピーターラビットまで

埼玉大学	アイザック・ニュートンの歴史書「改訂古代王国年代記」など
文教大学	文部科学省(文部省)検定済教科書を明治期から現行のものまで出展
聖学院大学	「BIBLE 和訳聖書の歴史」(『新約聖書路加傳』『引照新約全書』)、「ひらめきときめき図書館さがし」(子ども向けに専門図書館の解説を「からくり絵本」で紹介)
大東文化大学	「第59回読売文学賞 研究・翻訳賞受賞作品」紹介(インドネシア文学を翻訳した翻訳書と原書)、「アジア諸国の言語コレクション」紹介、「大東文化大学ピアトリクス・ポター資料館」の紹介
国立女性教育会館	「奥むめおコレクション」(アルバム写真)、「稲取婦人学級資料」(複製)
女子栄養大学	食に関する西洋古版本コレクションの紹介(ハート『食養論 初版』(1633)、ムノンの18世紀フランス料理文献『家庭料理 初版』(1746)など)

2009年(会場:浦和コミュニティセンター)  
サブタイトル:太宰治からフェアブルまで

跡見学園女子大学	「森鴎外と子どもたち」
国立女性教育会館	1977年以来、全国紙・地方紙に掲載された、男女共同参画及び女性・家庭・家族に関する新聞記事から(1)「女性初」として活躍した人物に関する記事、(2)「国連婦人の十年」に関する記事、(3)展示会直前の全国紙記事(2009.11.10-11.25)
埼玉大学	フェアブルコレクション、デカルト・カント・ショーペンハウエルの著作物・関係著作物
城西大学	「国勢調査の歴史」(第1回国勢調査報告書、国勢調査以前の統計資料など)
女子栄養大学	創設者香川綾の精神を引き継ぐ教員・学生の研究成果、図書館所蔵の食育関連資料
聖学院大学	「聖書の出版と翻訳の歴史」(ウイクリフ訳などの聖書展示)、「ひらめき・ときめきサイエンス一本を解剖する」(本を題材とした子ども向けプログラムの実施報告)
文教大学	「文学部3学科ゆかりの古典資料」(江戸期の草及紙など)ほか、マザーグース関連書、「史記」関連資料
立教大学	太宰治「人間失格」自筆草稿・初版本複製など
立正大学	田中啓爾文庫より「長崎和蘭陀屋敷図」「長崎阿蘭陀出島絵巻」

の図書を展示した。展示した図書については「働くってなに?」「ビジネスマナー」など15のテーマに分け、同一テーマの図書を見渡せるような展示をした。

2010年(会場：さいたま市文化センター)

跡見学園女子大学	「メディアの変遷」(SP 盤の展示、プレーヤーによる再生)
国立女性教育会館	「奥むめおコレクション」から消費者運動に関する資料(映像資料の再生)
淑徳大学	「拓本の世界一石に刻された中国歴史資料」
城西大学	「漢方医学古書と道具」(「解体新書序図」などの古書と葉にまつわる道具)
女子栄養大学	「育てる、作る、食べるー農園体験からー」
聖学院大学	「ライブラリアンは電子出版の夢を見るか? Do Librarians Dream of "iPad"?」(粘土版やパピルスの展示から電子書籍用端末の体験)、「聖学院学術情報発信システム SERVE 紹介」
文教大学	「フランス近代国民教育制度の成立と発展」(フランス革命以後の国民教育の成立に関するオリジナル史料)
立正大学	田中啓爾文庫より、江戸期に出版された絵図、和装本。明治初期に出版されたちりめん本。「ペルリ提督日本遠征記」など



図1 2010年、跡見学園女子大学の展示(SP 盤の展示と再生)

それぞれの図書館には、出展図書館によるコメントをカードに印刷して図書館に挟み込み、来場者が手に取りやすいよう配慮した。現物の展示と同時に、図書リストを作成し来場者に配布した。また、埼玉県内の大学や機関が実施する社会人入試や、働きながら学べる制度、セミナー、公開講座、それらを支援する大学図書館のサービスに関する冊子を作成し、配布した。この冊子は好評で、オープン早々になくなってしまった。市民からの大学や図書館に対する期待の大きさをうかがい知ることのできた試みであった。

これらはいずれも、メーリングリストを通じて加盟機関に出展・情報提供・公開講座等の資料の提供

（埼玉：埼玉大学・短期大学図書館協議会 SALA）の活動を

を依頼した。図書の出展は結果として当時の幹事館だけとなったが、市民向け情報の提供については、加盟機関中21機関の協力を得ることができた。

このように、毎年参加機関は少しずつ入れ替わりながら8～9機関ほどが参加している。年々テーマの切り口、ネーミングが洗練されてきていると感じ

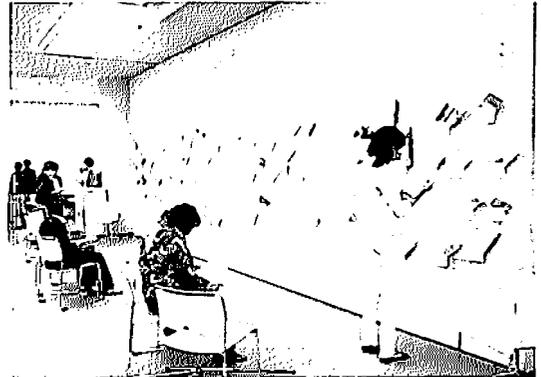


図2 2010年、「大学図書館のビジネス支援一仕事を考える80冊」合同展示の様子

2011年(会場：桶川市民ホール・さいたま文学館)

跡見学園女子大学	「Girl! Girly!! Girlish!!!」(「ガールッシュ文学」の紹介)
国立女性教育会館	「アイデア実用化の達人・九重年支子氏資料」(九重織の創始者、女性発明家の草分けである九重年支子の資料展示)
芝浦工業大学	「古書で見る工学の歩み」(工学系初版資料マリオット「流体論」(1686)、「電気の物理的研究」(1782)など)
城西大学	「日本近代漫画の先駆者ー北沢楽天」
女子栄養大学	「ガクシヨク シャシヨク バランスメニュー」(学生食堂、社員食堂に関する資料の展示)
聖学院大学	「くまのぬいぐるみと子どもの関係～テディベアを中心に」(「くま」の持つ魅力、「くま」を主人公とする絵本、ぬいぐるみなどの展示)、「図書館なう」ってつぶやこう!～新しい図書館広報～(Twitter や booklog を利用した図書館広報の紹介)
大東文化大学	「見たことある!アジアの言葉」9言語紹介のため、担当教員直筆で各地域のあいさつを紹介し、また各言語の図書を展示
東洋大学	「東洋大学所蔵の貴重資料の世界」(レオナルド・ダ・ヴィンチ「バリ手稿」[鳥の飛行に関する手稿](ファクシミリ版)など)
文教大学	「泉の中からべらぼうめ!! 俺の蔵書を見ていきなー清明文庫ー」(勝海舟の旧蔵書を含む約850点を所蔵する清明文庫から海舟の蔵書印や、自筆とみられる朱書きがあるものを展示)



図3 2011年、展示会場入り口付近の様子

ている。

広報についても、参加機関の職員が毎年洗練された広報資料を作成してくれている。図4は2010年のリーフレットのの一部である。

4.3 参加者数等

表2は、第2回(2008年)からの参加者数の一覧である(記録からSALAの展示スペースに来場した

だいた方と参加者総数を抜粋した。実際のカウントは展示の説明等を行いながらカウンタで集計しているため厳密な値ではない。

表2 参加者数

開催年	SALA 会場	参加総数
2008	317	1,513
2009	398	1,730
2010	1,011	2,956
2011	726	1,598

2008年から2010年まではさいたま市内で開催し(2008, 2009は同一会場で、2010年は別会場)、2011年は桶川市で開催している(2012年も同一会場で開催予定)。展示スペースの区割り等が異なるため、単純な比較はできないが、大都市圏に近いさいたま市で開催していた時に比べ、2011年は参加者数の減少が見られた。そこで、2012年については、運営組織の中に「企画・広報部会」を設置してより積極的な広報活動を行い、参加者数を増やすことを目指している。

図4 「図書館と県民のつどい埼玉2010」リーフレット(一部)

#### 4.4 参加することの「意義」

SALAは埼玉県図書館協会の下部組織ではなく、別々の機関である。形式的に言えば、この「つどい」へは「協力機関」としてかかわっている。

このイベントに大学図書館が協議会として協力し参加する意義はどこにあるだろうか？

大学図書館の学外者への開放が進んだとはいえ、(当然ではあるが)たとえば公共図書館よりその中では見えない、というのが実情である。市民にしてみれば大学図書館が一体どんなところかを知る機会は決して多くはない。

そうした中であって、「所蔵資料の展示」という方法によって図書館が自らを市民の前にさらすことで、来場者との交流が生まれる。たとえば本学が2008年に行った文部科学省検定済教科書の展示の際には、来場者の多くが、それを「なつかしいもの」として手に取って、感想を述べてくれた。

また、参加機関の職員は、イベント当日は「説明要員」でもある。来場者の多くが大学生でもなく教員でもない一般市民に自分のところの展示資料を説明することは、コミュニケーション・スキルのトレーニングという側面もいくばくかあるだろう。

また、2010年に試みたように、図書館という枠を超え、大学の市民向け活動を紹介することで、大学が地域社会に対してどういった貢献ができるかということを示そうとした経験も貴重なものとしてある。これは、大学・図書館の対外的なPRという側面とともに、対内的(機関内的)にも、図書館が大学の地域連携の窓口のひとつとなり得ることを示すものとしてとらえることができるだろう。対外的には大学のアドボカシー活動にかかわることであり、対内的には図書館の親機関に対するアドボカシー活動である。2012年には2010年の経験を踏まえ、その第2弾をうっていかうか、という声が発行委員からは出てきている。

また、企画段階から県内のさまざまな立場の図書館関係者が集まって企画をしていくことにも意義が見いだせよう。このような県内の図書館及び関連機関が一堂に集まってひとつのイベントを実施しているという例は寡聞にして聞かない。まだ十分とは言えないが、こうした経験を積み重ねていくことが、館種を超えた図書館のネットワークを強固なものとしていくきっかけになるかもしれない。異なった館種の交流から生まれてくる財産はけっして小さいも

詰本：埼玉県大学・短期大学図書館協議会(SALA)の活動  
のではない。

#### 5. おわりに

本稿では、SALAの活動のうち、地域連携活動である「図書館と県民のつどい埼玉」への取り組みを紹介した。

この「つどい」の参加機関は実のところ幹事館であるところが少なくない。幹事館同士は、年に何度か開かれる幹事会、そしてメーリングリストで日常的にコミュニケーションをとっているの、「仲間意識」といったような感覚をもってこのイベントに取り組んでいるのだと思う。しかし、幹事館以外にも参加する機関が毎年ある。そうした機関には、こうした取り組みを「おもしろい」ものとして経験してもらえればと考えている。ものごとはおもしろくなければ続かないし、自分たちの血肉にもなりにくい。どの図書館も人員削減等により厳しい環境におかれている。そうした中でこうしたイベントに取り組むことは現実問題として大変なことではあるだろう。しかし、だからこそ、一緒に取り組むことで、共に楽しみ、成果を出していくことが貴重な経験になるのではないかと思う。

「共通経験」という言葉がある。自館のなかにこもるのではなく、他者との共通経験を生み出す努力・試みが、ひいては図書館コミュニティの活力を取り戻すきっかけのひとつになるのではないだろうか。

#### 注

- 1) 「図書館年鑑」2012年版による
- 2) <<http://www.sala.gr.jp>>。[引用日:2012-07-09]
- 3) <[http://www.sailib.com/tudoit/?action=common\\_download\\_main&upload\\_id=146](http://www.sailib.com/tudoit/?action=common_download_main&upload_id=146)>。[引用日:2012-07-09]
- 4) 第1回を含め、記録は以下のサイトで見ることができる。<<http://www.sailib.com/tudoit/>>。[引用日:2012-07-09]